

## 32 英語の状態動詞は本当に進行形をとることができないのか

学校教育では「be, like, know, resemble」のような**状態動詞 (stative verb)** は進行形をとらない」と教えられる。しかし、実際のところ、このような状態動詞の中には(1) や(2b) のように進行形をとる例もみられる。

- (1) I'm living in Tokyo.
- (2) a. \*I'm liking you.  
b. I'm liking you more and more each week. (久野・高見 2010: 1)

例えば、状態動詞の live は(1) のように進行形をとることができるが、同じ状態動詞の like は、(2a) のように非文となる。しかし、(2b) のように more and more と each week のような副詞句と共に起すると、文法的となる。ここでは、(1) の live のような状態動詞の性質を明らかにすると共に、本来不可能なはずの進行形がどうして(1) と(2b) のように可能になることがあるのか、その理由の説明を試みる。

まず、英語の進行形の意味を見てみよう。Kranich (2010: 1) は、英語の進行形は「主に、**進行中の動的状況 (an ongoing dynamic situation)** を表す」と述べている。また、Quirk et al. (1985) によると、進行形の意味は、次の3つに分けられる。

- (3) a. 進行形が表す事象には継続 (duration) がある。  
b. 進行形が表す事象には限られた間の継続 (limited duration) がある。  
c. 進行形が表す事象は必ずしも完結しているとは限らない。

(Quirk et al. 1985: 198)

さらに、Quirk et al. (1985) によれば、(3a, b) は**一時性 (temporariness)** という概念にまとめられる。Kranich や Quirk et al. の記述から、進行形で表された事象は「進行中で動的」、「一時性」、「未完了」のいずれかの要素を持っていると言うことができる。

ところで、述語動詞は**アスペクト (aspect)** を持つ。中村・金子 (2002: 31) によると、アスペクトとは「1つの出来事の始まり、経過、終わりに注目する概念」であり、次のように説明されている（ただし、(4a-d) は Vendler (1967) による分類）。

- (4) a. 状態 (state) : 継続性があり、終点がなく、静的。(like, know)  
b. 動作 (activity) : 継続性があり、終点がなく、動的。(walk, dance)  
c. 完成 (accomplishment) : 継続性があり、終点があり、動的。(build a

house, draw a circle)

- d. 達成(achievement)：継続性がなく、終点があり、動的。(reach the summit, notice a sign) (中村・金子 2002: 31)

まず、(4a-d) のうち、動的か静的かという点で、(4a) の状態のみ静的であり、他の動的な(4b-d) と区別される。また、終点があるかどうかという点で、(4a, b) の状態と動作が、(4c, d) の完成と達成と区別される。(4a, b) は終点がないという点で共通しているが、中村・金子(2002: 37)は「動作は到達点を加えることにより、完成に変化する」と述べている。つまり、文脈によっては、(4b) の動作も終点を示すことがある。よって、(4a) の状態のアスペクトのみ本来的に終点がないと言うことができ、(4a) のような動詞(状態動詞)が表す事象は、完了か未完了かを明確に区分できないと言うこともできる。

ここで、(4a) の状態のアスペクトが(4b-d) と区別される点を(5a, b) に示す。

(5) a. 静的である。

b. 終点がなく、動詞が表す事象が完了しているか否か区分できない。

(5a, b) の性質は進行形の持つ要素である「進行中で動的」、「一時性」、「未完了」のいずれにも合致しない。したがって、live や like のような状態動詞が使われているにもかかわらず、(1) と (2b) で進行形が可能なのは、これらの例の場合、live や like が(5a, b) の性質を持っていないためだと考えられる。つまり、(1) では、何らかの理由で一時に東京に住んでいると解釈できるのであれば、(3a, b) の「一時性」という進行形の意味と合致する。(1) を改変した(6) の例を見てみよう。

(6) I'm living in Tokyo because I was forced to live there.

(1) は(6) のようにbecause節を加えることによって、東京に住むことが一時的で、後に別の地域へ移り住むことを示唆することになり、より容認可能な文となる。また、(2a) が非文であるのに対し、(2b) が文法的である理由は、(6) と同様に、副詞句のmore and more とeach week にある。この副詞句によって、(2b) は週ごとに「君が好きだ」という気持ちの度合いが増していく様を表し、気持ちが変化し続けていることを示唆している。ゆえに、(2b) は、(1) と同様に、(3a) または(3c) の進行形の意味と合致し、文法的な文となる。

以上のことを踏まえると、状態動詞も副詞句等の共起する要素によっては、その性質が変化し、進行形をとることが可能となる。

(島野 恭平)